

第2章 従業員に伝える日、事業承継の本当の重み

大阪府事業承継・引継ぎ支援センター
統括責任者 兼田 亜貴



「皆さん、手を止めて2階の会議室へ集まってください」

スピーカー越しに響くA社長の声に、工場の機械がひとつ、またひとつと止まっていく。その光景を前に、ふと足がすくみそうになる。

――従業員の皆さんは、この事実をどう受け止めるのだろうか。今日は、従業員への開示の日。この瞬間の張り詰めた空気には、何度立ち会っても慣れることがない。契約が結ばれ、M&Aが成約する。しかし、それだけでは本当の意味での事業承継は完結しない。むしろ、その先に待っている「従業員への説明」こそが、経営者にとって最大の山場なのだ。

やがて、従業員の皆さんが次々と会議室に集まってくる。どこか不安げな空気が漂う中、A社長が静かに口を開いた。M&Aによってオーナーが変わること。そして、自身が本日付で社長を退任すること。その言葉を、誰も遮ることなく、静かに受け止めていく。うなづくベテラン社員。涙をこらえる若手社員。安堵の色をにじませる工場長。そこには、声にならないさまざまな感情が行き交っていた。それでも共通していたのは、経営者の決断をまっすぐ受け止めようとする姿だった。この日を迎えるまでに、A社長がどれほど悩み、考え抜いてきたか。会社の未来と、従業員一人ひとりの人生。その両方を背負いながら、何度も立ち止まり、それでも前に進み、ようやくたどり着いた決断だった。その過程を間近で見てきたからこそ、私は、その重みごと丁寧な伝えたいと思った。

「この日のために、今から何ができるか」その問いは、すべての経営者に突きつけられるものだと思う。私たち事業承継・引継ぎ支援センターは、その問いと向き合い続ける経営者の背中に寄り添い、最後まで伴走する存在でありたい。そう、あらためて強く感じた一日だった。

